
白(ちょうわ)の魔法使い

ガネガネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白の魔法使い

【NNコード】

N4325Y

【作者名】

ガネガネ

【あらすじ】

2×××年、誰もが『魔法』を使用出来るようになった世界。そこに、藤林流矢ふじばやしおりゅうやという少年がいた。彼はある『目的』のために、世界でも有数のエリート校、『私立聖十字陽青学園』せいじゅじゅうじょうせいがくえんに入学する。特殊な力を持つ彼はそこで、幼馴染との再会と、たくさんの出会いを重ね、一人の魔術師として、そして一人の人間として大きく成長していく。

流矢の『目的』とは何なのか。彼の力とは。全ては彼と時間によつて明かされていく。

これは作者の処女作です。すこく駄文かと思われます。ですが、暇潰し程度に読んでくだされば作者としてはとてもうれしいです。

プロローグ（前書き）

初めての投稿です。とんでもなく素人ですがよろしくお願いします。また、アドバイスなどがありましたらよろしくお願いします。時間がかかると思いますが、出来るだけ文章力向上していきたいと思います。

プロローグ

「流矢、絶つ……対に無理はしちゃダメよ……」

「大丈夫だよ、母さん……流矢兄はメチャクチヤ強いんだから……」「そうよ母さん……でも、無茶だけは絶対にダメだからね。兄さん」

流矢と呼ばれる少年は彼の家族からそんな言葉をかけられていた。
藤林流矢。それが彼の名前である。身長は170?近く。髪と瞳は

漆黒の様な濃い黒。どちらかというと細い体なのに、その腰には1m近くの『剣』がかけられていた。

「分ったから、皆もそんなに心配しないで」

流矢はそう、自分の家族に答える。彼の目の前にいるのは、双子の

兄妹、和希

かずき

と音葉。そして母親の雪葉。三人は流矢と違った茶色の髪と瞳をして

いた。何故なら流矢と彼らは、血のつながりを持つていないからだ。しかし、流矢も雪葉達も、そんな事を気にしていない。むしろ、本当の家族のように接している。だから、家族からの一つ一つの言葉が流矢にとっては、素直に嬉しかった。

ふと、流矢は自分の腕時計を見てみる。午前8時ちょうど。そろそろ出なければ彼の用事に遅れてしまう。

「じゃあ、もう時間だからそろそろ行くね」

「気を付けてね」

「兄さん、ちゃんと毎日、電話で連絡してね?」

「流矢兄、頑張ってね?」

家族からの言葉を背に、彼は自分の家をさる。

4月4日。今日は流矢の学校の入学式。彼は心の中に秘めた『目的』のために新しい日常へと、その身を投じる。そしてそれは、彼の人生を大きく変えた最初の出来事でもあった。

主人公設定と『魔法』について

主人公設定
・藤林流矢

・身長は170cm近く。整った顔つきだが、童顔のため、実年齢より若く見られる事がある。髪と瞳は黒色。父親と母親、双子の兄妹との5人家族だが、流矢だけ、血のつながりは無い。しかし、当の本人達はそれについては気にせず、本当の家族の様に接している。腰には、1m程の『剣』をかけている。

「魔法について」

何百年も前にその力が一般的に証明された。当時は、術式とそれを発動させる呪文^キが必要だったが、今ではデバイスを使い、魔力のある者なら誰でも簡単に魔法を使えるようになった。魔力はその強さをS S ~ Cの六段階に分けられる。流矢はBランクであり、一般レベル。また、魔法は6つの系統に分けられ、魔法師は一人一つの系統しか使えない。まれに、二つ以上の系統を使う事が出来る魔法師もいる。

系統は火・水・風・雷・地・無に分けられる。（流矢の系統についてはまだ秘密。）

「デバイスについて」

術式と呪文をデータ化し、それを保存したもの。術式と呪文は、自分で開発出来たため、デバイスの容量を超えるまで保存する事が可能。魔法を使用する時、魔法名を言うことにより、術式が自動的に展開される。旧式は自分の戦闘スタイルに合った形のものを使っていたが、今の最新型はそれを、コンパクトな形に変換する事が可能になった。そのため、今では旧式を使う魔法師は少なくなった。（

流矢のデバイスについてはまだ秘密。）

入学式～再会～（前書き）

体調不良のため更新が遅れてしまいました。すみませんでした。これからは2日に1回のペースで更新出来ると思っていますので、これらもよろしくお願いします。

入学式～再会～

私立聖十字陽青学園、通称『聖陽』。魔法師の育成を目的とした、世界でも有数のエリート高校である。ここではどの学校でもあまり見ない特徴がある。その一つがここに入学試験だらう。普通の学校は、魔法についての知識を判断するペーパー試験と、受験生の魔力のランク、そして魔法をどれだけ使えるかを判断する実技試験の3つを行う。しかし、聖陽はその3つを行わない。その変わり、トーナメント式の1対1の試合で合否を判定する。それは、受験生の真の実力を見極めるため。

つまり、聖陽学園に合格した人は真のエリート、またはその卵なのである。並大抵の受験生ではここに受かることが出来ない。しかし、戦いには『予想外の出来事』や『例外』が付き物である。流矢もまた、その『例外』の一人であつた・・・・・・。

1-E組。そこが、流矢がこれから1年間過ごす新たなクラスだった。新入生は事前に知されていたクラスで、入学式が始まるまで待機しているよう学園側から連絡があつた。流矢は予想以上に早く学園に着いたため、かれこれ20分程自分の席で座っているのだが・・・・・・、

「（これは・・・・、確実に見られている。いや、別に自意識過剰とかではなく・・・・。）」

見ず知らずの、おそらく自分と同じ新入生であろう、多くの生徒から目線による針の筵攻撃を喰らっていた。それらの目線は、純粹な好奇心のもの、何か疑うかのようなもの、非難的なもの、好意的なもの（これについては、流矢が鈍感なため気付いていない。）など様々だった。流矢は元々目立ちたがりやな性格ではないので、こういったものは大変、居心地が悪かつた。

「（多分、俺の試合を見たんだろうなあ・・・。）」

流矢は今の状態になつた理由について、心当たりがあつた。

毎年、この学園を受験する受験生は1000人近くにおよぶ。試験期間の3日間の内に合格者を決めるため、受験生はA～Eの5つのブロックに分けられる。そして、各5つのブロックで60人、計300人の合格者が決められる。行われる試合の全ては学園内に設置されたアリーナの受験生専用モニタールームで、リアルタイムで見る事が可能である。おそらく、流流矢の試合もそこで見られていたのだろう。

「（ま、あの『力』を少し使っちゃたし、あの『力』に対応出来る武器も珍しいから、仕方が無いといえば仕方が無いんだろうけど。それに、『あの』判定で合格したからなあ・・・。）」

この学園の合格者の決める方法はいたつてシンプルで、1つのブロックで60人の勝者がこの学園に入学する権利が与えられる。それが基本的なだが、1部例外が存在する。例外とは『特別合格者判定』という制度である。

試験の試合には1つずつ、3人の試験監督がつく。試験監督の役目は、受験生が違反（相手を殺す）などをしないかを観察するのが基本的なだが、実はもう一つの役目がある。それは、「その生徒がこの学園に有能かどうか。」を判断する役目である。試験監督の3人が全員、その生徒が有能と判断した場合、その生徒はその場で合格が決まる。これが『特別合格者判定』である。流矢はその制度で合格したのであつた。注目されるのも当然だろう。

「（そういえば、俺の対戦相手、あのままトーナメントに残る事になつたけど、どうなつたんだろ？）」

ふと、そんな事を考えていると、
「えつと・・・、ちょっとといいかな？」

突然声をかけられた。

「へ？」

突然声をかけられたため流矢は、素つ頓狂な声をだしてしまつた。

振り返るとそこには、一人の女の子が申し訳なさそうな顔で流矢の事を見ている。おそらく、流矢が変な声をだしたので驚かしてしまったと思っているのだろう。

話しかけてきたその子は、肩まで伸ばした茶色の髪に、二重まぶたが特徴的な顔立ちをした子だった。初対面という感じはしなかつた。しかし、思い出す事ができない。

「えっと・・・君は？」

「あっ、もしかして・・・覚えてない、かな？」

少女の顔はさの時一瞬、微かに、だが確実に、悲しみの色を帯びた表情へと変わった。それを見た流矢は、

「えっ、あっ、いや違うんだ？ついこの間まで受験だつたから切羽詰まつてて、今は記憶が曖昧とうつか・・・」

基本流矢の性格は、誰かが困つていたり、悲しい顔をしていたらほつとけない、人の善い性格である。それ原因が自分ならなおのこと。今もその例外ではない。早く田の前の少女について思い出すため、あれこれ言い訳をしながら、記憶の引き出しを端から、片つ端に開けていく。

そこで、一つの思い出が蘇つた。

それは、今から5年近く前の事。仲の良かつた幼馴染との別れる直前の事。泣かないよう唇を噛み締める自分と、泣きながらも一生懸命笑続けた一人の女の子。

確か、その子の名前は・・・。

「もしかして、君は、美羽？」

そう流矢が聞いた途端、目の前の少女は、パアッと、顔が明るくなつた。それはまるで、夏の太陽の下で咲くヒマワリのようだ。

雲雀美羽。はばりみわ流矢が小学5年生の頃まで同じクラスだった、いわゆる幼馴染というやつである。小5の2学期の終わり、彼女は家の事情によりイギリスへ転校してしまつた。それつきり、お互い連絡を取つていなかつた。

「よつ、良かった。憶えててくれてたんだ？」

よほど嬉しかったのだろう。美羽は流矢の両手を握ると、その細い体では想像出来ない強い力で、上下に勢い良く何度も振る。

「ちょっと、ちょっと美羽！振り過ぎ、振り過ぎ？肩が外れる？」

流矢はあまりの痛さにそう叫ぶと、美羽は両手をすぐに離し、バツの悪そうな顔で、

「ごめん、あまりに嬉しかったから……」

と、謝る。

「ハハハ……そういう所は変わらないね。それにしても驚いたな）。まさか美羽とここで、また会えるなんて」

「それはこっちのセリフ。試験の時は驚いたわよ。たまたまモニター見てたら、流矢が映っている上、特別合格者判定されているんだもん。ま、流矢の力なら当然かもしれないけど」

「ありがとう。あの時は俺も驚いた。まさかあの判定を、自分が受けるなんて思わなかつたからね。ま、何にせよこれからまた同じクラスみたいだし、ヨロシクね！」

「うん、またヨロシク？あつ、そういうばさ……」

久し振りの幼馴染との再会。積もる話もたくさんある。どちらかが口を開けばお互いの話は止まることがない。それは流矢達も同じだつた。しかし、それを途中で遮る者が現れた。

二人が家族についてや、新しい友達について話していると、

「お取り込み中のところ悪いんだけど、ちょっとといいかな？あ、藤林君に用があるんだけど」

また、流矢は声を掛ける。今度は男子生徒だった。短めの銀色の髪にメガネをかけている。身長は流矢と同じぐらいである。知的なイメージを感じさせるその生徒に、流矢と美羽の二人は見覚えがあつた。

「あなたはもしかして……」

「試験で俺と戦った……」

「憶えててくれてたんだ。じゃあ、改めて自己紹介するね。僕の名前はビオージオ・サクティス。ビオと呼んでくれ。また会えて嬉し

いよ藤林君。つて、あれ？一人共、何をそんなに驚いているの？」

これは仕方のない事だつた。なすなら、

「だつてあなた・・・・・・・」

「そんな性格じやなかつたよな・・・・?」

そう、今日の前にいる少年は、試験の時は全くの別人だつたのだ。試験の時、流矢の対戦相手はかなり強かつた。たが、それよりも印象的だったのがそのキャラが暴力的な戦闘マニアだったことである。しかし、今流矢達の前にいる少年はその面影すらない。試験の時は180度違つた、真逆の雰囲気を出している。驚かない方が無理な話である。

その事を本人に話すと、

「ああ、その事。実は僕、少し変わってしまったね。メガネを外しちゃうとああなるんだ。試験ではメガネが壊れないように外してたんだ。驚かしてゴメン」

やう詮れひ立ホは頭を下さへくる あります、

「いや、別に気にしなくつもいいよ。それよりも、あの後勝ち残る事が出来たんだね。おもっとう。俺は藤林流矢。流矢つ呼んでよ。これからヨロシク

「私は雲雀美羽。私

「いやらしく口をきく。矢流、美羽」

「ええ、東洋の、ヨーロッパの、アーティストたちが、

さつきまつで笑っていたビオは、急に真剣な顔つきになつた。

「えつ、何？」

「実にかつてな事だと思うんだけど、僕を君のライバルにしてくな
いだろうか？」

「へこ？」

流矢はあまりの突然の申し出に、再び素つ頓狂な声を上げてしまつ

た。だが、すぐに彼はニヤリと嫌味氣のない笑みをみせる。

「そんな事か。俺なんかで良ければ喜んで。機会があればまた戦おう、ビオ」

「臨むといつや。その代わり、次はまけないよ」

そお言いながら、ビオも流矢と同じ様な笑みを浮かべる。こつして、流矢は2つの再会をはたしたのだった。

入学式へ出会いー

「生徒の皆さんへ」連絡をします。後15分で入学式が開かれます。新入生及び、在校生の皆さんは速やかに体育館へ移動してください」流矢が美羽とビオとの再会をはたしてから10分後、学園内に入学式の開始を知らせる放送が流れた。

「やつと時間が。美羽、ビオ。俺らもそろそろ行こつか?」

流矢はそう言いながら、席を立つ。それにつられる様に一人も席を立つ。気付けばクラスのほとんどの生徒が体育館へ移動しているところだった。

「そうあえ、私達の担任の先生ってどんな人なんだろう?」

廊下を歩いてる最中にそんな事を聞いてきた美羽は、興味津々といった顔で流矢とビオを見ている。よほど気になるらしい。

「そうだな・・・・、それは式で発表される事だからまだ何も言えないけど確かに気になるな。ビオはどう思う?」

「そうだね・・・・、案外個性的な先生よりも、普通の先生かもしれないね」

「えへつ。それはつまらないよ。やっぱり私は個性的な人がいいな

」

そをなたわいの無い会話をしていると、校舎の玄関口についた3人は何やら人混みができていて、に気付いた。

人混みは生徒のみでできていた。

「どうかしたんですか?」

流矢は人混みの1番外側に立っていた一人の女子生徒に声をかけてみた。その女子生徒は、美羽の赤色のスカートと違い、緑色のスカートを履いていた。この学園の生徒は学年別に男子はネクタイ、女子はスカートの色が分かれている。青色は3年生を、緑色は2年生を、赤色は1年生である事をしめしている。つまり、流矢の前にいるのは2年生だということだ。

その2年生は困った顔をしながら、

「実は、移動・召喚魔法を応用した空間魔法がかけられているみたいなの。別にこういう事は毎年、入学式当時に在校生や先生達の誰かが、が新入生を歓迎するためにするんだけど……、「

「だけど？」

「今日は少しイタズラが過ぎてて、さつきからこの魔法がとかれないの。今もSランクの無系統の生徒が解除魔法をつかっているんだけど、それでも解けなくて……」

その言葉に流矢達3人は驚きを隠せなかつた。

解除魔法。無系統魔法師なら最初に誰でも習う初級レベルの魔法である。無系統のほとんの魔法は、物理的ダメージを相手にあたえるものがない。そのアドバンテージを無くすために、何百年も前に開発されたのが解除魔法だと言われている。効果は対象の魔法を無効化にすること。それだけを聞くと、「全ての魔法の中で一番強いのではないか。」と思うかもしれない。が、実はそうでもない。この魔法にはいくつかの欠点がある。

まず1つ目は、デバイスをもちいても、それを発動するまで5秒～15秒の時間がかかるしまう事。2つ目は、対象の魔法の効果が現れなければ効果がない事。炎で生み出した壁や剣には有効だが、爆発や雷撃などの『一瞬で効果が出る魔法』には無効なのである。

また、それによってできた傷を治すことも出来ない。3つ目は魔力の大きさにも比例する点である。魔力Bランクの魔法師がSランクの魔法師の魔法を打ち消すのは至難の技だし、逆にSランクの魔法師がBランクの魔法師の技を簡単に打ち消してしまつ。が、使い方次第では戦いの突破口に繋がる事が出来る。

別に今かけられている魔法を解除魔法で打ち消すことは可能である。それをSランクの魔法師がやっても出来ない。その事実に、流矢とビオの2人だけは唖然としてしまつた。

「ちなみに、今かけられている魔法はどんな現象を起こしているんですか？」

驚いている2人とは真逆の、何故か落ち着いている美羽は2年生の女子生徒に尋ねる。

「範囲はかなり大きくて、私達のいる校舎全体よ。何でもこの校舎の全ての入り口からでも、また中に戻って来るらしいの。移動魔法を使つても出られなくて。学園内にこんな大掛かりな魔法を使える人はいないから多分、数人の魔法師がこの魔法を発動しているんだとおもうの……」

それを聞いた美羽とビオは、

「流矢、ここはあなたの出番よ？」

「そうだよ、君ならこの魔法を解けるかもしねー！」

急にそんな事を言い出してきた。

「ハアツ？ お、俺の出番ってなんだよ？ なんで俺なら解け……あっ、そういう事か^{ムチャぶり}」

いきなりの提案に流矢は戸惑う。だが、美羽達が自分に何を求めているのか、すぐに理解出来た。

「でも、Sランクの魔術師がやつても解けない魔法に、俺のが対応出来るか、分からぬぞ？」

「いや。君の『あの力』は試験の時、Sランクの僕の魔術に有効だつた。やってみなければ分からないさ」

「それにあなたは、困っている人はほつとけない性格でしょ？」幼馴染と好敵手の言葉を聞いた流矢は、「はあ……」と溜息をつく。

「失敗しても、文句はナシだからな……」

ぼやきながら、生徒と達が1番多く集まる玄関口に向かう。その様子をただ見ていた2年生は、

「えつ、えつ？ あなた、この魔術を解けるの？」

と、聞いてきた。それに対し流矢は

「いえ。解く事は無理です。でも、ここから出ることは出来るかもしません」

そう答えると、腰にかけていた剣を抜く。入り口まで来てみて、

外の景色が不規則に歪み続けていた。おそらく、魔法によつて空間を遮断したためだろう。

流矢はそこへ手をかざすと、小さな声で何かを確かにつぶやいた。次の瞬間、彼の剣が白く、明るく光り始め出め、入り口の前に一つの魔法陣が現れた。それを見ていた誰もが息を呑む。流矢はその、白く輝く剣を魔法陣に突き刺す。

ズブリ。

まるで、そんな音が聞こえてきそうだった。そして次の瞬間、入り口が剣と同じ様に輝やいたと思うと、外の景色の歪みが無くなつた。流矢の前にいきなり、青色のネクタイをした一人の男子生徒が現れた。おそらく、空間を遮断していた魔法が消えたために、その姿が見れるようになつたのだろう。その顔はただただ、驚いているやうだった。

「今のは、君がやつたのかい？」男子生徒がそんな事を聞いてくる。

「さあ、どうでしょう？」

流矢は相手が上級生にもかかわらず、とぼけた様な感じで答え、美羽達を呼ぶと体育館へと何事も無かつたかのように歩いていった。先程まで話していた2年生の女子生徒がその光景をただ、興味深くげに見ていたことにも気づかず・・・。

入学式～出会い～

現在、午前10時ちょっと前。流矢達は体育館に設置された大量のパイプイスの3つに座っていた。先程の悪戯から5分近く経った今では、新入生を含む全生徒900人と先生方が、かなり大きめの体育馆に集まっていた。（後に分かつた事だが、あの魔法はほとんどの先生方が協力していたらしい。）

生徒達は学年別に座る事になつてるので、流矢達と話していた2年生はここにはいない。美羽は、「そういうえば、あの先輩の名前聞いてなかつた！」と言つてその彼女を見つけようとしたが、2年生が座つている席には、彼女は見当たらなかつた。「一人も捜してよ」と催促された流矢達は仕方なく、美羽の手伝いをする。

流矢が彼女を捜そつとあちこちを見ていると、さつき魔法を解いた時玄関口の外側にいた3年生と目が合つた。3年生は流矢に向けて、意味あり気な笑みを見せていた。その行為にどう対応せればいいのか分からなかつた流矢は、とりあえず誤魔化すために曖昧な笑顔でかえす。

（はあ）。力を誤魔化すためとはいえ、あんな素つもない態度をとつたからなあ。どう接すればいいのかわからんねえ・・・・。）

と、そんな事を考えていると・・・・

「隣、よろしいでしようか？」

また誰かに声を掛けらるた。声の主の方を振り返ると一人の1年生がたつっていた。一人は男子、もう一人は女子。声を掛けたのは女子の方らしい。

（わざわざ何で人の許可をつるんだろう？）

そう思いながらも流矢は、「ああ、いいよ」と柔らかな態度で答える。

ありがとう、と頭を下げるとき女子生徒が流矢の隣、男子生徒がその隣に座る。そこで流矢は初めて、周りの席がほとんどどまっている

のに気付いた。入学式では席を1年、2年、3年と分ける事以外指定はされていない。大方、ここに来た頃には一人一続きで座れる所がここしかなかったのだろう。そう推測していると、

「君が噂の藤林君だよね？」

男子がそんな事を聞いてきた。

「そうだけど・・・、噂つて大袈裟じやないかな？」

「何言つているのさ。滅多に出ないあの、『特別合格者判定』で君一人だけが受かつたんだ。噂になるに決まつていりじやないか」

「ははは・・・。ありがとう。ところで君達は？」

「あつ、自己紹介がまだだつたね。僕は大橋原達也。おおばしづらたつや君と同じクラスだ。苗字が長いから達也つて呼んでよ」

「私の名前は北王子理沙です。私の事も名前で呼んでください。」

「分かつた。じゃあ、俺の事も流矢でいいよ。ちなみに俺の左隣にいるのが・・・」

「幼馴染の美羽よ」

「・・・で、その隣が・・・」

「ビオージオ・サクティスだ。ビオと呼んでくれ」

いつの間に聞いていたのか、二人は流矢よりも早く自分の名前を答える。そんな二人に流矢が苦笑していると

『これより、入学式を始めます。生徒は全員静かにしてください。来賓の方々は携帯の電源を切るかマナーモードにし・・・』

そんな放送が体育館に流れた。どうやらやつと、今日のメインが始まるらしい。それまで騒がしかつた者もその放送を聞くと同時に口を開ざす。流矢達もそれにならい一度会話を区切り前を見る。壇上に、陽青の長である学園長が上がつている所だつた。

『全員、起立』

放送の指示に従い、体育館内の人間が一斉に立ち上がる。ようやく入学式が始まつとしていた。

「ふわああ・・・・・・・・」

入学式が始まって50分近くが経過し、あまりの退屈さに流矢はあくびをする。今は学園長が話しているのだが、これがやたらと長かった。話し始めて40分近くになる。つまらない話は時間が経つにつれ、流矢にとって子守唄になる。いつその事この天国への誘い（ようするに眠気）に身を委ねようか、と思いながら流矢は目を閉ざそうとすると、隣の美羽に肘で突つかれる。

「（これが終わつたあと、次の生徒会長の挨拶で式が終わるから、もう少し我慢しなさい。）」

「（ただけど、つまらない話を長々とされたら、どうしても眠くなるじやんか。これは人間の一つの本能だと思うんだが・・・・・・。）」

「（何が本能よ。ほら、もう目が覚めたでしょ）」

そう言われてみると、美羽との会話で、流矢の先程の眠気はいつの間にか飛んでいた。

仕方ない、と思いながら学園長の方へ視線を戻すと、学園長は壇上から降りている所だった。美羽と話している内に、長い子守唄は歌い終えたらしい。再びやる気を取り戻した流矢は、姿勢をただし直す。

『それでは最後に、本校生徒会長から新入生へ挨拶があります』

そう放送が流れると、壇上に青色のスカートを履いた一人の女子生徒が上がった。小柄だか、整ったプロポーションに整ったルックス。柔らかなそうな雰囲気はどこか、日本の姫君を連想させていた。

見る者全てを魅力する存在。彼女を見た新入生のほとんどが、彼女に目線を釘付けにしていた。そんな中、流矢、美羽、ビオの三人は周りとは全く別の反応をしていた。ただ驚き、口を開いていた。それは仕方のない事。何故ならばその生徒会長は、入学式の前、玄関口で会つた2年生の女子生徒だったのだから。

入学式終了

『新入生の皆さん、初めまして。現生徒会長の、31-A、泡桐絵里香です。一部の新入生はもう、私と会ったよね？玄関口で』
そう少女が言うと周りを見渡す。と、そこで流矢達と目が合つた。
また二コリと笑う。まるで、イタズラが成功した子供の様に。それ
を見た流矢は驚きを通り越して、やや呆れた顔をする。

（あの人気が生徒会長だったのは凄く驚いたけど、何である時2年のスカートを履いてたんだ？まさか、これのためなのかな？）

そんな事を考えながらふと、美羽達を見てみる。どうやら同じ様な事を考えていたらしく、美羽とビオも流矢と同じ様な顔をしていた。

それから20分程が過ぎた。生徒会長、絵里香の挨拶は学園長の話よりは短かったものの、そこそこ長かった。が、話の中で、これら行われる行事や学園についてなど、新入生の目を引くような情報を時折混ぜている為、退屈にならないですんだ。そのため流矢は、絵里香が話し始めてからまだ一度、眠気がきていない。

『少し時間がオーバーしてしまいましたが、これで挨拶を終わります。』

絵里香がそう言うと、流矢は心の中で、

（はあ～。やつとこれで式が終わるよ。きつかつた……）

と言いながら自分の腕時計を見る。短い針が12の数字を指そうとしていた。この後、生徒は各教室に戻り、30分程H.R.をした後下校となっている。流矢は、家から学校まで距離がある為、学校の寮でこれから3年間暮らす事になっている。

（寮つて3人部屋なんだよな。誰と同じ部屋になるんだろう。楽しみだな～）

まだ式が終わっていないのに流矢が少々浮かれていると、まだ壇上から降りていらない絵里香はとんでもないことを言い出した。

『最後に、急な変更ですがこれから、1-E 藤林流矢君に代表として、新入生の抱負を語つてもらおうと思います』

・・・・・・・・・・・・・・

「なつ、ナニ―――ツ？」

数秒の静寂の中、一番にそう叫んだのは勿論、いきなり『指名を受けた流矢である。流矢自身は学校側から、抱負について全然聞いていない。それは他の生徒も同じである。おそらく本当に急な変更だつたのだろう。だが、流矢が1番驚いたのはそこではなく、自分が指名された事である。

「ちよつ、ちよつと待つてください？えつ、え？何ですかこれはドッキリですか新入生いびりですか？てか、俺の意思是無視ですか？」

『はい、無視です』

音速の返答。二口つと再び見せる生徒会長の笑みは、流矢には悪魔の笑みにしか見えない。しかも何か彼女の後ろに、ドス黒いオーラの様な物が見える。言われなくとも、それが何を意味するのか、彼には分かる。『早く来い』と言つている事を。

「りゅ、流矢。早く行つた方がいいよ・・・・・・

「僕もそれがいいと思う。何か会長さんの後ろから、黒いオーラが見えるし・・・・・・」

左を向くと、彼の幼馴染とライバルが流矢の身の危険を感じたのか、怯えながら心配そうにこちらを見ている。

『私もそう思います。あの人があの悪魔に見えてきました』

右では理沙が、美羽達と同じ事を言つている。しかし、その顔は、今の状況を面白がっているのか二口二口と笑つていた。

こっちの方がよっぽど悪魔である。

その隣では達也が、何も言つていないが下を向いて、「くつ、くくつ・・・・！」と笑いを堪えていた。

『こいつ等は後で地獄を見せてやるufs』と流矢が固い決心をたてる

とふと、別の視線を感じた。顔を上げてみると体育館内の人間が全員、流矢を見ている。中には流矢に同情している人もいたが、ほとんどは『行け』っと目線で訴えている。

どうやら助け舟を出してくれる人はいないらしい。

「ハア～…………」

流矢はこの世の終わりの様な溜息をつくと、静かに席を立つ。もう、どんなに反論しても無理だらう。とりあえず、今やるべき事は……

・・・・・

(何を話せばいいんだろう?)

話の内容を考える事だ。

「あー、緊張した・・・・。話している内に何喋ってるのか分からなくなつたから、内容グチャグチャだつたかもなあ・・・・。」「いやいや中々の名演説だつたと思うよ。是非とも参考にさせてもらひよ。」

「全くそのとおりだ。今度また機会があつたら同じ話をしないか? 次は学校関係者以外の前で」

「あつ、それ面白そうね」

「ええ。流矢君是非、そうしてください」

「美羽とビオはともく、達也と理沙はまだ叩かれたいのか? てか、面白そうつてなんだよつーか理沙テメエちゃつかりお願ひしてんじやねえッ?」

流矢の一戦一代の演説も無事にすみ、入学式を終えた流矢達は、H R前の休み時間を談笑して過ごしていた。(ちなみに入学式を終えた直後流矢は、達也と理沙の二人をハリセンでぶつ叩き、しつかり

お仕置きをしていた。ハリセンをどこから出したのかは謎。四次元ポケット所持の疑惑あり）

入学式直後の数ヶ月、席順は自分達で決めていいらしく、流矢は真ん中の列の最後尾の席に座っていた。他のメンバーは、ビオは流矢のすぐ前に、美羽は流矢の左、理沙は右に、達也は理沙の前の席に座った。

「そう言えば、理沙と達也は元々知り合いなのか？式の時は一人で俺に話しかけてきたけど？」

「いや、お互い今日知り合つたばかりだ」

「へつ？ そうなのか？」

予想外の返答に流矢は、少し間抜けな声ができる。

「ええ。たまたま同じバスに乗り合わせて、その時達也さんが隣の席に座るよう促してくれて……」

「んで、話してみてみたらお互い同じ雷の系統のを知つて、そのまま意気投合つてわけだ」

「そういう事です。そういえば私達、まだ流矢さん達の系統を教えてもらつていませんでしたね」

「そういうばあそうだな。俺はビオの系統はしつているけど、美羽とは魔法を教わる前に別れたから分からないな。」

「そうなんだ。あつ、ちなみに僕の系統は火だ。美羽は？」

「私は風。流矢は？」

「俺か？ 実はな・・・・・、分からんんだ。」

流矢の言葉に、他の4人の頭の上にハテナマークが浮かぶ。

「分からんないなって。流矢それ、どういう事？」

「魔力光で分かるだろ？」

達也の言う『魔力光』とは、魔法発動時に展開される魔法陣から発せられる光の事である。魔力光は系統により分かれている。火は赤色、水は青色、風は緑色、地は茶色、雷は黄色、無は灰色である。だが、流矢は・・・・・・

「美羽てビオは見ただろ？ 玄関口で俺が魔法を発動した時に展開さ

れた魔法陣を・・・・・

その言葉に一人はその時の事を思い出す。

「そういえばあの時・・・・・」

「流矢の魔法陣は確か『白色』に光つて・・・・・・・・・。ツ? ちょっと待つてくれ! 白色?」

ビオは大声で叫ぶ。当然だ。この世界に白の魔力光は存在しない。

「んなバカな・・・・・・・・」

「そんな事、あり得ません! ・・・でも、実際にそれを出す流矢さんがここにいる・・・・・。あれ? 魔力光が存在しないものであれば、その系統も存在しない事になります。なのに流矢は魔法が使っている。流矢さんの使っている魔法は一体?」

「それについてなんだが・・・・・・・・」

「みんな席について。HR始まるわよ!」

クラスの女子が廊下を見ながらそう言つていた。確かに時計を見つみると、休み時間が後數十秒で終わろうとしていた。

「悪い、話の続けは放課後にさせてくれ。その時に全部話すよ」「仕方ないわね

「絶対だかんな!」

達也がそう言つと、それを合図に流矢以外のメンバーは前を向いた。その後、タイミングを見計らつたように、教室に一人の人物が入つて來た。

それを見てクラス内の生徒は、あまりに驚いて目を見開き、ビオはその人物を見るなり頭を抱えてしまつっていた。

教室に入つて來たのは、この世の物とは思えない、絶世の美女だったのだ。

「それでは皆さん、これからHRを始めます

生徒達(ビオは別)があまりの美貌に声を失い、静まり返つた教室で、担任であるうつその女性だけが口を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4325y/>

白(ちょうわ)の魔法使い

2011年11月27日20時57分発行